



バックナンバーや屋久島国有林における入林申請等は
こちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/



鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1

TEL0997-42-0331 FAX0997-42-0333

屋久島世界遺産地域科学委員会・ヤクシカWG合同会議を開催

(2月26日～27日)

平成30年度第2回世界遺産地域科学委員会とヤクシカ・ワーキンググループ及び特定鳥獣保護管理検討委員会の合同会議が2日間にわたり、鹿児島市の市町村自治会館において開催されました。

■ヤクシカWG (2月26日)

会議では、①ヤクシカの生息状況や捕獲状況等について②平成30年度及び平成31年度の取組等について③森林生態系の管理目標について、各機関から説明がありました。

これまで議論を重ねてきた「森林生態系の管理目標」については、植生垂直分布の多様性の回復など管理目標に掲げる4項目を基本とし、目標達成状況把握のための指標や実施場所については今回示された方向性で考え、今後は、順応的に実施段階で改善していくことと了承されました。

■科学委員会 (2月27日)

科学委員会の主な議題は、①屋久島世界遺産地域管理計画の見直し及び地域連絡会議構成組織の見直し②モニタリング調査等の結果報告及び31年度の実施計画③山岳部における利用の検討状況④高層湿原保全対策等についてで、環境省から管理計画及び地域連絡会議構成組織の見直しについて説明され、委員から、改訂・見直しのルール化や作業部会の必要性について、またエコパークとの関係性や民間団体の参加等



会議の様子



会議の様子

について議論されました。

引き続き、平成30年度事業実績及び平成31年度事業計画等について説明、議論がなされ、平成30年度の高層湿原保全対策検討会については、第1回検討会及び第2回目開催と併せて、現地検討会を各委員等関係者が参加して行い、活発な議論と今後の対応策が出されたことを報告しました。委員からは、湿原内の精密な地形図の作成や木製歩道と流路の関係性等々、モニタリングし保全対策に努めるよう助言等がありました。



説明する古市所長

屋久島の林業と小杉谷の歴史を学ぼう (2月24日)

熊毛地域労働者福祉協議会から屋久島森林管理署へ要請があり、森林管理署の後藤主任森林整備官等と当保全センターの奥村生態系管理指導官が同行し、協議会員 31 名に対して屋久島の林業等について説明及び案内しました。

当日は、小杉谷小中学校跡地において、小杉谷の歴史探訪と言うことで周辺を案内する予定でしたが、あいにくの大雨となったことから屋久杉自然館において、折れた縄文杉の枝やビデオなどを鑑賞して、屋久島の森林・林業や屋久杉の全体像に触れて頂きました。

続いて、安房貯木土場へ移動してヤクスギ土埋木に触れて頂き、森林管理署の会議室へ場所を移し、後藤主任と奥村指導官から屋久島の林業や小杉谷の歴史及びヤクスギ土埋木について説明を行いました。

参加者からは、「大雨が残念でしたが、屋久島の林業の歴史について、大変勉強になった。来年もご協力をお願いしたい」等の感想を頂きました。

今後とも外部からの現地調査等を積極的に受け入れて、国有林野事業に対する理解を深めてもらう取組を行っていく考えです。



会議室での説明状況

屋久島地杉コンテナ苗 (さし木) を植栽 (2月18日)

当保全センターでは、2017 年秋から取り組んでいる「屋久島地杉コンテナ苗 (さし木) の育苗試験」において発根した苗木を、屋久島森林管理署と共同で、屋久島町梶川集落付近の国有林へ試験的に植栽しました。

今回、植栽した苗木は、2017 年の秋さし木及び 2018 年春さし木で発根し山出し苗の規格まで成長した 90 本を、3 試験区に分けて 30 本ずつ植栽しました。植栽時に根元径と苗長を測定し、今後 5 年間にわたり同様の調査を繰り返し、成長記録を把握するとともに屋久島の森林・林業等の活性化に繋げていきたいと考えています。

これまでの間、関係者で意見交換を行いながら民国連携の下「チーム屋久島」として育苗に取り組み、これからの屋久島のために世界自然遺産と共にスギ人工林を木材資源として活用することが重要です。今後とも多様な生態系の保全の観点からもバランスのとれた持続可能な森林づくりへ、屋久島一体となり取り組んでいく考えです。



植栽したコンテナ苗

登山上のマナーとルールを守りましょう！

3月1日から、縄文杉荒川登山口車両乗り入れ規制が始まります。

屋久島の自然環境や快適な利用環境を守るため、みなさまのご協力をお願いします。

- 屋久島には固有の動植物が数多く生息・生育しています。捕獲や植物の採取や損傷はしないでください。
- 湿原や苔の多い沢などの景観を守り荒廃を防ぐためにも、登山道以外に足を踏み入れないでください。
- 登山道の荒廃や植物の保護のためにも、ゴムキャップの着いたストックを使いましょう。
- 登山中に発生したゴミは必ず全て持ち帰りましょう。また、水場で食器類を洗ったりすると水が汚染されますので紙で拭き取り、持ち帰りましょう。

～屋久島山岳部保全利用協議会「マナーガイド」より～

ヤクスギ林の長期モニタリングの取り組み（第1回）

高嶋 敦史（琉球大学農学部 与那フィールド 助教）

今回から3回は、ヤクスギの森で行われている長期モニタリングの取り組みを紹介します。

ヤクスギの森では、江戸時代の17～18世紀に伐採活動が行われていたことが知られていますが、昭和の中ごろにあたる1950年代後半から1960年代にかけても大規模な伐採が行われました。当時の伐採はチェーンソーを使ったより近代的な手法になり、その結果、ヤクスギの資源は急激に減少しました。この事態を受け、林野庁は1969年に調査団を派遣し、「屋久島国宥林の自然保護に関する調査報告」がまとめられました。この報告の中では、ヤクスギ林の伐採面積縮小、保護林の設定、展示林の設置などが提案され、花山・国割岳学術参考保護林の設定や、屋久杉鑑賞林（ヤクスギランド）、白谷雲水峡の設置へと繋がって行きました。

そのような折、熊本営林局（現・九州森林管理局）はヤクスギ林の管理の参考とするため、1973年から74年にかけて九州大学と合同で5箇所に面積1.0haの固定試験地を設定しました。ヤクスギランドに3箇所（小花山、天文の森、二人だけの小径）、花山地域に1箇所、白谷雲水峡に1箇所という配置で（図-1）、試験地内の胸高直径4cm以上のすべての幹を測定するという方法で現在まで繰り返し調査が行われています（白谷はのちに0.8haに縮小）。森の変化や樹木の成長はとも



も緩やかですが、これらの長期モニタリングの結果から、ヤクスギ林の樹木の構成や幹本数の変化、直径や樹高の成長量などの貴重な情報が得られつつあります。それらの成果の概要は、今後2回の原稿の中で紹介していきたいと思えます。

私は九州大学の吉田茂二郎教授のもとで学び、一連の調査には2001年の天文の森の調査から参加しています。この天文の森の調査が私の卒業論文のデータとなりましたが、その後も各試験地の調査に参加し、2009年には5箇所の試験地の各3回の調査結果をとりまとめて博士号を取得させていただきました。

近年は、現在勤務している琉球大学などの学生を引率して屋久島に来ることも多くなり（写真-1）、感慨深い思いです。また、勤務地である琉球大学与那フィールドがある沖縄島北部やんばる地域は、2020年の世界自然遺産登録を目指しており、屋久島から繋がる縁も感じているところです。

それでは拙文になりますが、今後2回の原稿にもよろしくお付き合いください。



写真-1. 2017年の天文の森調査



屋久島の植物 イズセンリョウ（サクラソウ（ヤブコウジ）科）

本州中部以南に分布する常緑小低木。照葉樹林の林床に生育している。花期は3～5月、釣鐘形の黄白色の花をつける。葉は波状の浅い鋸歯または全縁。シマイズセンリョウは低地の林縁にあり、葉の鋸歯ははっきりしている。



屋久島東部地域の垂直方向植生モニタリング調査（平成28年度）

●調査結果の整理・分析等

②ヤクシカ被害

平成18年度調査の時は、標高200～600mの下層植生であるイヌビワ、ボチョウジがヤクシカの食害を受け、ほとんど枯死していた。平成23年度調査の時は、前記種に加え標高200～600mにおけるヤブニッケイとマテバシイの稚樹・萌芽枝とヤクシマアジサイ、トクサランなどへの食害が目立ったが、一方で、アリドオシやイズセンリョウなどの忌避植物の個体数の増加が目立った。

今回の調査では、一度消滅してしまったイヌビワやトクサランの個体は見られなかったが、ボチョウジ、ヤブニッケイ及びマテバシイの稚樹や萌芽枝への被害が減少し、またヤクシマアジサイに対する食害の程度が少なくなり、ヤクシカの食害を受けていない個体も見受けられた。

③風衝被害、雷被害

標高800mから1,000mにかけての尾根沿いでは、平成11年度の台風による風倒被害で多くのウラジロガシやアカガシが立ち枯れし、その後にバリバリノキ、イヌガシ等の先駆樹種が林冠を優占する照葉樹林となっていたが、今回の調査にて、それらの高木層に代わってタブノキやアカガシなどが高木層の優占種になりつつあった。また、今回の林冠閉鎖に伴いサクラツツジやハイノキ等の低木、亜高木層の被圧による衰退が目立ち始めてきた。

標高1,000mは、平成13年度に雷被害を受けた大きなギャップ(40m四方程度)があったが、ハイノキやサクラツツジ、イヌガシの旺盛な進入による植生回復が見られ、裸地は無くなったが、シカの忌避植物のみの林になりつつある。

屋久島林業あれこれ今昔 第3話 消えた集運材方法「修羅とインクライン」

江戸時代、屋久島ではヤクスギの平木などを背負ったりして、人の力で山から麓まで下ろしていました。

大正時代の終わりから安房斫伐所が様々な事業を実施し、ヤクスギの丸太を大きな仕掛けによって現場から運び出すことになりました。

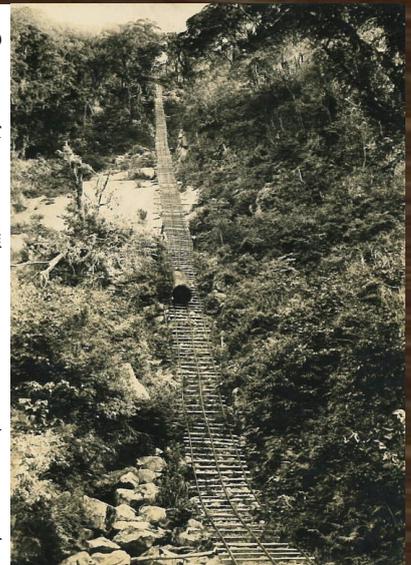
その運び出す方法に、今では全く見かけなくなりましたが、「修羅(しゅら)」「インクライン」がありました。

修羅は、斜面に山の木を使い大きな滑り台と樋を合わせたようなものを作り、その中に丸太を滑り落として集める方法です。

インクラインは、ケーブルカーと同じ原理で、急勾配の斜面に設けた線路の上を2台のトロリーが上下する施設です。丸太を積んだトロリーを制動機で加減しながらワイヤーで釣りおろし、同時に空車を引き上げるもので、小杉谷や宮之浦、永田、栗生などの現場に設けられました。

修羅やインクラインと森林軌道を組み合わせて、山奥の現場から海岸沿いの貯木場まで丸太を運び出しました。

インクラインなどの方法は、昭和30年代まで使われましたが、山にワイヤーを張り廻らして木を運び出す架線集材の能力が高まるとともに、その役割を終えました。



永田斫伐所インクライン
(平均勾配30度・長さ600m)